

3.教養教育の改革に向けた取組み

1)PA型教育の学部への導入	50
2)PA型教育の実践	52
3)PA型教育の達成度を評価する方法の考案・試行	54

3. 教養教育の改革に向けた取り組み

1) PA型教育の学部への導入

学生が社会参加の経験を通して民主主義社会における市民性（シティズンシップ）を獲得することを目指すPA（パブリック・アチーブメント）型教育が来年度より全学部（医学部は除く）のカリキュラムに導入されるにあたり、学内外にその意義を広く発信するとともに、各学部において必修科目4科目への理解と専門科目でのPA型教育導入の具体的理解をより深めるため、シンポジウムと参考動画教材の制作を行った。

①教養教育シンポジウム

11月27日に湘南校舎のTechno Cube（19号館）において、教養教育シンポジウム「シティズンシップ育成をめざす教育改革 ～東海大学におけるパブリック・アチーブメント型教育の挑戦～」を開催した。

本シンポジウムは、学生が社会参加の経験を通して民主主義社会における市民性（シティズンシップ）を獲得することを目指すPA型教育について、来年度から全学部（医学部を除く）のカリキュラムにPA型教育を導入するのに先立ち、学内外にその意義を広く発信することを目的とし、代々木、高輪、清水、伊勢原、熊本、札幌の各校舎にもテレビ会議システムで発信し、当日は各校舎の教職員や学生ら約130名が参加した。

開会にあたり山田清志学長があいさつし、続いて筑波大学人間系教授の唐木清志氏が「シティズンシップ教育の今」をテーマに基調講演を行った。シティズンシップ教育やサービス・ラーニングを専門とする唐木氏は、社会参加を通して市民性を育成する手法を解説した他、日本の小学校、中学校、高校の評価制度で用いられる資質・能力について語り、「授業の中では学問的な事柄だけではなく、学習することへの姿勢や人間性等、ペーパーテストでは判断できない部分にも目を向けてあげてください」と呼びかけた。

また、現代教養センターの木村英樹所長が、本学で実践してきたPA型教育の取り組みとその狙いについて講演。2006年にチャレンジセンターを設置し、学生によるプロジェクト活動や選択科目を通じて地域との連携を図ってきた当初の様子や、学内で教職員向けの研修会を実施した事例を紹介し、「チャレンジセンターだけではなく、今後は学部学科でも社会的な課題解決に向けた教育環境を整備していく」と語った。

その後行ったパネルディスカッションには、健康科学部社会福祉学科の稗田里香准教授と国際教育センターの西川恵准教授、現代教養センターの堀本麻由子准教授、唐木氏が登壇。堀本准教授の進行の下、地域連携センターが昨年度発行した『TOKAI CITIZENSHIP WAVE』でPA型教育を活かした実践的な授業の事例を紹介している稗田准教授と西川准教授は、取り組みの内容とその後の成果等について発表した。「授業の中で教員自身が心がけていること」というトークテーマに対しては、学生のやる気や自己肯定感を高めるための仕掛け、学部ごとに異なる学生の性質によって使い分ける促し



筑波大学人間系教授 唐木氏



現代教養センター 木村所長



健康科学部社会福祉学科 稗田准教授

方等、それぞれが実践している事例を紹介した。

最後に梶井龍太郎副学長が、「チャレンジセンターを設置した10年前、アクティブラーニングやPA型教育の導入が必要だと感じ、5年前にTo-Collaboプログラムを構築し、来年度から必修科目のPA型教育4科目をスタートさせる。登壇いただいた先生方をはじめ、お集りいただいた皆さんと一緒に新しい教育制度をつくり上げていければと思う」と語った。



国際教育センター 西川准教授



②必修科目「ボランティア」参考動画教材の制作

来年度の全学部（医学部を除く）のカリキュラムにPA型教育を導入するにあたり、全校舎で共通した教育を行うべく、PA型教育教材作成の一環として、現代教養センターの教員を中心に必修科目4科目のうち「ボランティア」について参考教材として動画教材を制作した。

動画教材では3名の社会人ボランティアにご協力いただき、事前ヒアリングを経て、ボランティアを始めた動機や日常生活における位置づけ、普段の活動やボランティアを通じて得ているもの、人生における意味等についてインタビューを行った。そして動画編集の際は、文学部広報メディア学科の協力の下、学生2名によるナレーションを加え、授業内で使用しやすいように1人7分前後の動画にまとめた。

動画完成後は、授業の試行として、2018年2月に行われた各校舎で活動しているチャレンジセンターのチャレンジプロジェクトメンバー約40名が参加する「2017年度チャレンジセンターリーダー研修会」の講義及びグループワークで使用された。

研修会参加者は1～2年生が中心だったが、動画を観て感じたことを共有する場面では、「自分の仕事や知識をベースにしてボランティアができることを初めて知った」、「私たちが参加するボランティアに対する意識と社会人ボランティアの方々のボランティアに対する意識の違いを感じた。普段から感じているプロジェクト活動に対するメンバーの熱の違いとも通じているのではないか」等の意見が出された。



2) PA 型教育の実践

全学部（医学部を除く）で導入される必修科目4科目の試行として、連携自治体や教養学部、現代教養センター等の協力の下、複数の授業内で地域課題の解決、改善に向けた提案制作を実践し、連携自治体からは自治体職員による事業説明やフィールドワークへの同行、複数の関係部署に対する提案・発表の場をご提供いただく等、来年度につながる発展を見せた。

その中から、1年間を通して「持続可能な地域づくり」をテーマに地域課題に取り組んだ全学開講科目「プロジェクト入門A」及び「プロジェクト入門B」と、昨年度に引き続き実施した平塚市主催の対話集会「市長と語ろう！ほっとミーティング」を紹介する。

●プロジェクト入門A・プロジェクト入門B「持続可能な地域づくり」

2017年度前期開講の「プロジェクト入門A」では、実際に地域で起きている課題や取組みについて関係者から話を聞きながら、学生の視点で「持続可能な地域づくり」を考えることを目的に、事前の座学やゲスト講義を受講した後、平塚市の「ららぽーと湘南平塚」周辺地域である平塚市宮松町にて現状や課題を調査するフィールドワークとして宮松町自治会館での石田自治会長との面談等を行った。

その後、宮松町にとって何が課題で、それを解決するためにはどうしたらいいかを話し合い、マップ制作に取り組んだ。制作した「宮松のみんなをつなぐまちマップ」は、報告会で参加した宮松町自治会役員や平塚市職員から「もっとたくさんのお店を紹介してほしい」「新しく住み始めた人も多いので、商店街を歩いただけではわからないことを盛り込んでみては？」等の意見が寄せられた。



2017年度後期開講の「プロジェクト入門B」では、「持続可能な地域づくり」に対して、より具体的な解決提案を行うため、課題を「宮松町における公園の活用」に絞り、グループ毎にフィールドワーク等を行って提案をまとめ、2018年1月23日の提案発表会に臨んだ。

当日は5グループが「宮松町『公園マップ』」、「自然に触れ合え！ネームプレート&自然アート制作編」、「ゆるスポーツを体験しよう！」、「公園から始まる商店街の活性化・交流・防災」、「大学と宮松町が食でコラボ！？公園を活用した商店街活性化イベント」についてそれぞれ提案発表し、発表会に出席した平塚市みどり公園・水辺課、商業観光課、企画政策課の職員からは「もっと学生らしい柔軟な発想でも構わない」「スポーツイベントや商店街の活性化等、公園の可能性はまだまだあると改めて感じさせられました」等のご意見が出された。



●平塚市主催の対話集会「市長と語ろう！ほっとミーティング」（教養学部、現代教養センター）

「市長と語ろう！ほっとミーティング」は、落合克宏平塚市長が市民からの要望や意見を聞き、市政に反映しようと2011年度から実施されており、「若い人の意見を政治に反映したい」という市長からの要望を受け、地域連携センターが協力し、学生27名が参加して実施した。

今回は「湘南平の魅力アップ」をテーマに設定し、学生たちは、市長との対話集会に向けて、10月3日に平塚市秘書広報課シティプロモーション担当やみどり公園・水辺課の職員から湘南平の現状について事前に説明を受け、10月17日の市長との対話集会に臨んだ。

市長との対話集会は湘南校舎で行われ、学生から平塚市が取り組む政策に関する質問、東京オリンピックに向けて外国語表記の追加や事前キャンプ地としてのPRについての意見が出される等、活発な議論を交わした後、湘南平でのフィールドワークや読売広告社総合ソリューション局シニアプランナーによる公開講座「地域創生とシティプロモーション」の受講を経て、アイデア提案に挑み、2018年1月16日に平塚市役所にて市長の他、関係部署の課長にも出席いただき、発表を行った。



当日は3グループが、「平塚市における外国人観光客向けの地域観光プロモーション」や湘南平を“〇〇の聖地”としてプロモーションイベントを行う「HIRATSUKA SHONAN HOLYLAND—“みんなの聖地”湘南平—」、「湘南平バラ園計画」についてそれぞれ提案発表し、市長や関係部署の課長から「既存のものを使って、どうやって街の魅力化を図るか考える力は、今の時代に必要不可欠です。今日の提案については、街の魅力化のため、出来る限り、取り入れながら、政策展開を図っていきたいと考えています」「地域連携といった観点も盛り込まれており、興味深かったです」「提案にあったイメージキャラクターの“こまひめ”は印象的でした」等の質問、意見が出された。



なお、この取組みの様子は、平塚市WEBサイトにも掲載された。

掲載ページ：http://www.city.hiratsuka.kanagawa.jp/kyodo/page-c_01441.html

3) PA型教育の達成度を評価する方法の考案・試行

本学では過去3年間、株式会社河合塾と株式会社リアセックが共同開発した「PROG」（専攻・専門に関わらず、大卒者として社会で求められる汎用的な能力・態度・志向（＝ジェネリックスキル）を育成するためのプログラム）という調査手法を用いて、成果評価を行ってきた。

今年度は、過去3年間の本プログラムの地域社会を通じた経験やPA型教育で身についた能力としての成果評価を考慮した学生の汎用的基礎力「コンピテンシー」測定と、その学生の「コンピテンシー」を形成した、あるいは高めた（低めた）要因を調査するため、併せて実施した学生行動調査等の蓄積データの相関分析を行い、本学の課題や特徴を分析した。

【分析概要】

①各学年文理別傾向について [分析対象：湘南・清水・熊本・阿蘇・札幌の3年間合算 計6,561名]

- 1年 2,412名（文系：1,165名 理系：1,247名） ■ 2年 2,002名（文系：941名 理系：1,061名）
- 3年 1,990名（文系：811名 理系：1,179名） ■ 4年 156名（文系：29名 理系：127名）

<分析>

各学年の文理別の特徴を見るため、学年毎に文系、理系学部のスコアを比較、高い項目に網掛けした。

<概要>

1年生から3年生までを見ると、本学の文系学部は、対人基礎力・対自己基礎力は理系学部を上回っているが、対課題基礎力においては逆転している。特に文系学部は、理系学部と比較すると、対人基礎力の「親和力」、「協働力」のスコアの開きが大きい。

	対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
				親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
1年文系	3.97	3.80	3.37	4.20	4.12	3.51	3.69	3.66	3.84	3.30	3.28	3.53
1年理系	3.24	3.31	3.46	3.45	3.37	3.07	3.25	3.22	3.45	3.56	3.29	3.63
2年文系	3.89	3.80	3.35	4.10	3.99	3.52	3.79	3.63	3.89	3.28	3.27	3.56
2年理系	3.43	3.41	3.59	3.67	3.51	3.26	3.37	3.30	3.47	3.60	3.43	3.68
3年文系	3.83	3.80	3.61	4.18	3.96	3.40	3.69	3.67	3.82	3.60	3.42	3.79
3年理系	3.40	3.46	3.74	3.62	3.54	3.17	3.33	3.46	3.48	3.80	3.52	3.94
4年文系	4.17	4.21	3.93	4.17	4.40	3.66	4.34	3.97	4.03	3.50	3.77	4.17
4年理系	3.65	3.99	3.90	3.72	3.92	3.48	3.75	3.99	3.94	4.13	3.60	4.00

②成長要因分析について [分析対象：湘南・清水・熊本・阿蘇・札幌の2016年受験者のうち、経年受験者かつ、学生行動調査を回収できた計668名]

<分析>

文理別に、PI値※を用いて、コンピテンシー総合の伸長上位層と伸長下位層を約30%抽出し、各層のアンケート回答から活動への取組みの違いを分析した。

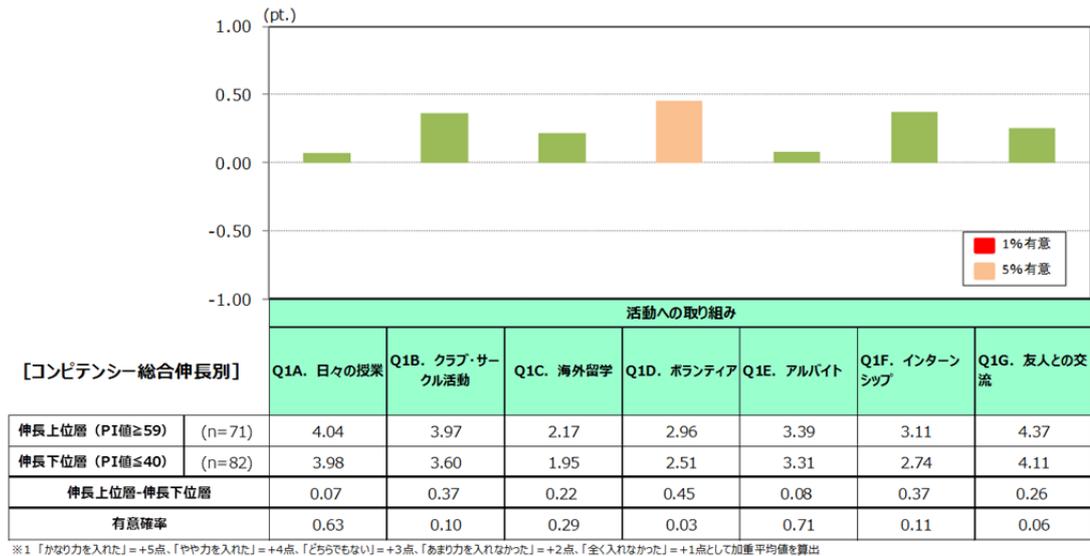
※PI値：事前（初期値）のスコアが低いほど、事後の伸び幅が大きいため、変化量の分析の際には、この初期値の影響を除去して考える必要がある。初期値の影響を除く方法として、PROGの経年変

化のデータから、前回レベルから今回レベルを予測するモデルを作成し、各レベル間の変化量（実測値）と、モデルから求められる想定変化量の差を、「望ましさ」を考慮して各レベル間のウエイトを設定した。このウエイトをPI値[Progress Index]と呼ぶ。

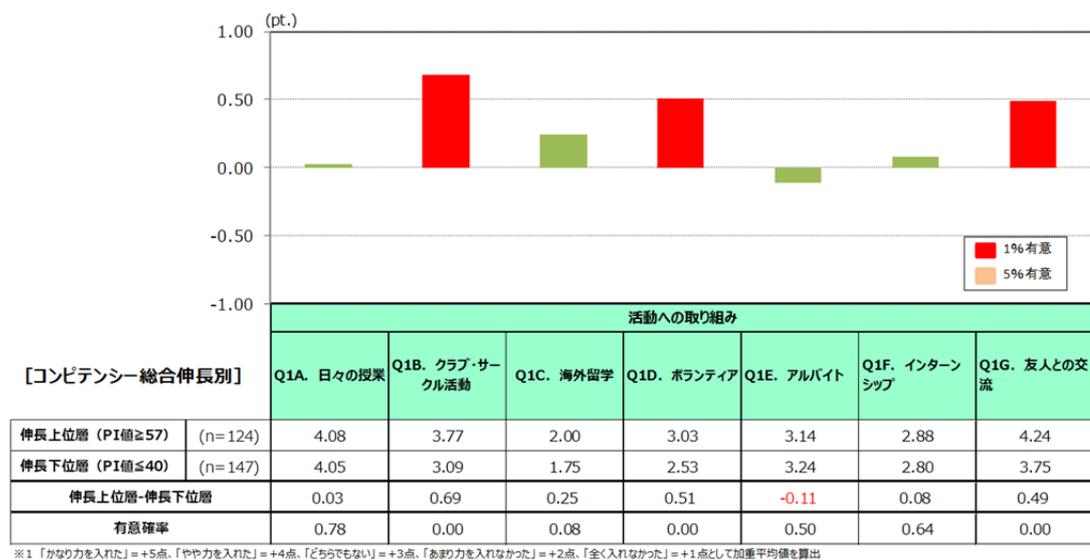
<概要>

文系学部、理系学部ともに、「ボランティア」は、上位層のスコアが有意に高い。また、理系学部を見ると、「クラブ・サークル活動」「ボランティア」「友人との交流」は上位層のスコアが特に有意に高く（1%有意）、上位層と下位層の差はクラブ・サークル活動 0.69pt、ボランティア 0.51pt、友人との交流 0.49ptとなっている。

【文系学部】



【理系学部】



こうした分析結果から、文理毎に課題は異なり、文系学部は対課題基礎力の醸成、理系学部は対人基礎力、対自己基礎力の醸成が期待される。

成長要因分析を見ると、文理共にコンピテンシー伸長者は「ボランティア活動」に力を入れている。責任が求められる中で、課題を設定し、チームで取り組む活動が能力開発に役立っていることがわかる。

今後、全学必修4科目や、チャレンジプロジェクトへの誘引等を通じて、多くの学生に上記のような取組みを、意図的に触れさせる機会をつくっていく。